

課題名	寒害襲来後のびわ果房の処置法
成果の要約	<p>寒波襲来後の果房の処置としては、発育の進んでいない果房は放任しておいた方がよく、発育の進んだ果房は凍死した幼果を摘除したほうが収穫果が多かった。</p>
成績概要	<p>寒害襲来後の果房の適正な取扱い方法を知るため、昭和56年2月26日から27日の異常寒波襲来の直後に、果房の発育程度を4段階に分け、その後の果実の発育と形質を調査した。</p> <p>(1) 果房の発育の進んでいる「幼果と孫花の果房」や「落弁果主体の果房」は生存果はあるが袋掛けの出来る果房は少なかった。発育の遅れている「着弁果主体の果房」や「つぼみと花の残存果房」は生存果が多く袋掛けの出来る果房も多かった。</p> <p>(2) 袋掛け時の果数は「幼果と孫花の果房」では、幼果を摘除したほうが全果数は多かったが「落弁果主体の果房」や「着弁果主体の果房」では放任しておいたほうが全果数は多かった。</p> <p>(3) 果実の肥大、品位は全般に放任しておいたほうが大玉で秀品果率は高かった。「つぼみと花の残存果房」は小玉が多くやや品位が低かった。</p> <p>(4) 果実の形質は発育の進んでいる果房が種子数も多く、糖度が高い傾向にあり、発育の遅れている果房は糖度が低く酸が高かった。</p>

第1表 着房，着果状況と収穫時期

果房の状態	処 理	全果房数	袋掛け果房数	袋掛け時の全果数	1果房当たり果数	収穫時別果数			1) 着色の早晩
						6. 10	6. 15	6. 20	
幼果と孫花	放 任	25	4	5	1.3	1	1	3	7.0
	孫花のみ残す	25	9	14	1.6	0	12	1	5.6
落弁果主体	放 任	25	7	18	2.6	3	12	2	4.7
	落弁果のみ残す	25	7	7	1.0	1	6	0	4.3
着弁花主体	放 任	25	14	69	4.9	11	29	6	4.5
	着弁果のみ残す	25	16	40	2.5	0	26	2	5.5
つぼみと花が残存	つぼみ花のみ残す	7	7	48	6.9	4	14	0	5.4

1) 着色の早晩 = $\frac{6月10日収穫果 \times 0 + 6月15日収穫果 \times 5 + 6月20日収穫果 \times 10}{全果数 \times 10} \times 10$

第2表 果実の大きさと品位

果房の状況	処 理	1果平均重	階 級 別 果 数					品 位 別 果 数		
			2L	L	M	S	格下	秀	優	格外
幼果と孫花	放 任	43 ^g		3	2			4		1
	孫花のみ残す	38		5	6	2		5	5	3
落弁果主体	放 任	39	1	9	3	3	1	15	1	1
	落弁果のみ残す	34		1	3	2	1	3	2	2
着弁果主体	放 任	39		21	18	6	1	33	3	10
	着弁果のみ残す	35		10	6	7	5	12	7	9
つぼみ花のみ残存	つぼみ花のみ残す	31		3	10	7	4	15	2	7

第3表 果実の形質

果房の状況	処 理	果 形			種子数	種子重	糖度	酸含量	糖酸比	果肉硬度
		縦径	横径	指数1)						
幼果と孫花	放 任	5.24 ^{cm}	4.00 ^{cm}	0.76	3.6	8.2 ^g	12.6	0.31 ^{g/100ml}	40.6	402 ^{g/cm}
	孫花のみ残す	5.13	3.67	0.72	2.7	5.8	12.2	0.32	38.1	292
落弁果主体	放 任	5.09	3.85	0.76	2.8	5.8	11.3	0.29	39.0	306
	落弁果のみ残す	4.90	3.57	0.73	2.9	4.0	12.0	0.37	32.4	286
着弁果主体	放 任	5.05	3.85	0.76	2.9	5.9	11.2	0.26	43.1	261
	着弁果のみ残す	4.88	3.63	0.74	2.5	4.9	11.9	0.32	37.2	299
つぼみ花のみ残存	つぼみ花のみ残す	4.65	3.57	0.77	2.6	4.9	11.1	0.35	31.7	323

1) 果形指数 = $\frac{\text{横 径}}{\text{縦 径}}$

2) 1果当たり